



神学校に行くということは、そこに  
流れている空気に触れることだと思います。

[道家]

というのはほんとうにいろんなことを決めなければいけなくて、それこそ愛餐会でお茶を出すのか紅茶を出すのかということから始まって、牧師である私に最終決定を委ねられた時に、よりみんなが喜んで奉仕できるような方向を選ばなければならない。例えば紅茶のほうがお茶より倍金額がかかるとしても、そちらの方がみんな喜んで奉仕ができるんだったらそちらを選んだ方がいいという場合もあるし、逆もあります。その時にどうやって考えるかという考え方を神学校で教わったかなと思います。

**大住:** それは小さなことのように、結構大事なことです。教会形成というのは、いろいろと難しい。こうしなければいけないということではなくて、たとえばみんなで作ることになっているのであれば、簡単なことでも自分一人でしてしまうのではなく、みんなが集まるのを待つということが大事なのでしょう。道家先生はいかがですか。

**道家:** 神学校に行くということは、4年間、あるいは6年間、その空気に触れるということだと思います。とにかく神学的にものごとを考えよう、どんなつまらないことでも、主が主語だ、神が主語だという考え方を、なんとなく、

ある意味では徹底的に、講義や神学生同士の交わりや生活の中で身につけることが、牧会に出てから生きていくに違いありません。だから、神学校にいる、その空気を吸うということはものすごく大事なことだと思います。それは、自己啓発とかほかのいろいろな言葉に置き換えられるかもしれませんが、結局、神学校、特に東京神学大学に流れている空気というのは、生活面まで徹底して流れている神を第一として組み立てるといえる考え方なんでしょうね。

**小椋:** それから、東京神学大学は召命共同体だという意識がはっきりしてますね。私は、献身というのは一人ひとりの決断でやることだと思っていましたが、その共同体に入ることによって自分も強められるし、悩んだり、苦しんだりしても、友人と共に祈り合い、お互いに支え合えるということです。私がこの東神大の教職セミナーに毎年参加するのも、やはりもう一度それを反芻したい、思い起こして元気をもらいたいということなのかもしれません。卒業間際は、早く伝道地に赴きたいというワクワク感と神学校の空気をもう少し味わっていたいという思いのせめぎ合いでした。でも、自分に繰り返して戒めていたのは、神学校はやはり学校

学問一般と同じように、神学は過去の研究との  
対話を進めていくことだと思います。

[小椋]



であって教会ではないということです。だから、ここに浸っていつまでも喜んでいるようではいけない。

### 東神大は、教会にお仕えするための学問を学ぶところ

**大住:** 牧師になるのであれば神学校に行かなければならないんだろうとは思っても、そこでどういふことを学ぶのか、それでどのような牧師になれるのかということはいまあまりわからないだろうと思います。お二人は、東神大に入ってとまどった授業というのはありますか。

**小椋:** みんなとまどいましたけど、忘れもしないのは、入学していちばん最初の授業が教会史だったことです。先生が早口で初代の教会からキリスト教公認の時代まで一気に話されて、同級生はみんな頭の中が「？」という感じになりました。もうちょっとゆっくり進むのかと思っていました。

**道家:** 私は、組織神学ですね。これはなんなんだろうと思いました。でも、今では一番大事なものだと考えています。それは、組織神学を学ぶことで、教会を秩序づけ、教会の枠をしっかりと持つことができるからです。東神大というのはやはり、教会に仕えるため

の聖書神学や歴史神学などを学ぶところで、それを束ねるのが組織神学だと思います。教義学とか弁証学とか倫理学とか、その区別さえ解らない時でも、組織神学の授業を受けていくうちに、教会と信仰はこういうふうと考えていくんだ、ということが身についていったんだと思います。それは、大学だけで終わらない作業で、牧師になってからも続けていることです。

**小椋:** 神学に限らず学問一般がそうなのかもしれませんね。学問というのは積み重ねられた過去の研究との対話を進めていく、その仕方を学ぶための授業だったんだなと思います。組織神学の授業などは、牧師になって様々な課題に直面している今受けてみたいという思いがあります。

### 東神大では、広大な世界への扉が開かれる

**大住:** 広大な世界に出会わされてしまっていて呆然としているのが、東神大の授業なのかもしれないですね。

**道家:** そうですね。東神大というのは地下水脈を掘ってしまったのでしょうか。掘ったあとどうするのか、作業ばかりだから悩むかもしれませんが、でも、それが福音の本質なんですね。

**小椋:** 私は、初めてギリシャ語を習って原典で聖書を読んだ時のあの感動は忘れられません。それまでは新共同訳という窓から見た景色しか知らなかったのですが、この窓の向こうにこんなに広大な景色があったのかという。学生が陥りやすいのが、釈義、ギリシャ語で読む楽しさにはまってしまったり、学部4年で夏期伝道に行くのに説教を書かなくてはならないのに、ギリシャ語を調べるのが楽しくて、それ以上先に進めない。でも、その楽しい経験を知っていてよかったと思います。掘れば掘るほど宝が出てくることですね。

## 東京神学大学後援会の働き

東京神学大学に入学した神学生は、日本基督教団をはじめ、各教団・教派の教職・信徒の皆さんの大いなる期待と夢をもって迎えられ、また背後でも支えられていることに気づきます。具体的な現れは、後援会という組織を通して、日本全国にある教会やキリスト教の学校・諸団体や教職・信徒の皆さんから寄せられる様々な形の献金・寄付金です。

東神大の後援会活動は学校の発足と合わせて始められ、今

日まで絶えることなく財政面で東神大を支えてきており、最近では大学の年間収入の49パーセントが献金・寄付金で賄われています。この負担率は欧米の大学のそれには及ばないものの、日本国内の他の大学のそれと比べれば跳びぬけて高い率です。神学校の特別な体質と言ってもよいでしょう。

しかし、これは決して危惧することではありません。学校開設当時から教会の教職・信徒の皆さんが、神学校の働きのために祈り支えようとされている、その息遣いがここに現れているのです。教会と神学校とは正に車の両輪です。

東神大の後援会は、日本基督教団の教区にほぼ対応した形で、地域ごとに地区後援会が組織され、教会・信徒の皆さん

に献金を呼びかけております。特に2007年からは10年計画を立て一層の拡充を図る運動を進めており、大きな目標としては、年間収入の56パーセントを献金・寄付金でお支えできることを目指しています。地区後援会では、随時、講演会や報告会、また夏には神学生の夏期伝道実習の受け入れに関する支援も行っております。

支援者の皆様には、東神大を一層身近に覚えていただき、祈り、かつご協力いただけるようお願いいたします。

後援会長 銀座教会信徒 岩澤 高

